

京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE プログラム  
「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」

# TRANS

「『翻訳』の諸相」研究会 Newsletter No.9

2004/07/16

## 活動状況

◆ 第二研究班が、以下の要領で、第 5 回研究会を開きました。この研究会と同研究班の第 4 回研究会の発表レジュメを、併せて本号に掲載いたします。

第 5 回研究会 テーマ：「戦争とフランス文学」

日 時： 2004 年 6 月 5 日（土） 午前 10 時より 12 時半まで

場 所： フランス文学研究室（文学部新棟 8 階）

- 発 表：
1. 早川文敏（京都大学研修員）「シリーズ『城から城』における人物描写」
  2. 小黒昌文（学術振興会特別研究員）「第一次世界大戦による＜土地＞の破壊— プルーストを中心として」

第 4 回研究会 テーマ：「死と医学」

日 時： 2004 年 4 月 10 日（土） 午前 10 時より 12 時半まで

場 所： フランス文学研究室（文学部新棟 8 階）

- 発 表：
1. 林田 愛（文学研究科博士後期課程）「エミール・ゾラと医学のポストモダン」
  2. 吉田 城（文学研究科教授） 「ヴェネツィアと死の表象 シャトーブリアン、バレス、プルースト」

◆ 第一研究班が、以下の要領で、第 9 回研究会を開きました。報告を本号に掲載しています。

日 時： 2004 年 5 月 15 日（土） 午後 1 時より

場 所： 京大会館 103 号室

報 告： 小西昌隆（早稲田大学助手）「ナボコフ訳・注『オネーギン』第 3 歌第 1 連から第 15 連まで」

参加者： 秋草俊一郎、芦本 滋、柿沼伸明、小西昌隆、三浦笙子、皆尾麻弥、若島 正  
(以上 7 名)

4 月から松蔭女子大学に着任された柿沼伸明さんが初めて参加されました。これでロシア文学関係者の層がぐっと厚くなり、喜んでいます。

\*活動状況（つづき）とお知らせを、研究会の報告（pp. 8-9）の後に掲載しています。

## 研究会発表（レジュメ）

### (1) 「ゾラと医学のポストモダン」（第二研究班第4回研究会 発表1）

19世紀末フランスにおける鉄道の普及、電気通信の発達は社会的速度を飛躍的に高めた。医学分野では、ヨーロッパ各地で麻酔学の発展に伴う外科手術の隆盛がみられることになる。このような科学文明の発達と近代医学の急速な発展は人と自然の関係を大きく変えた。哲学者のフィリップ・ミュレは、19世紀ほど人々の関心が「病」に向いた時代はないとする。文明化に伴う神経系統の病の増加、悪化する環境に追い込まれた人間が「健康」を勝ち取ることに躍起になった時代であり、それは近代医学と自然療法の相克に如実に表れている。近代のひずみが、医学史の文脈から立ち現れる。「近代医学」という枠組みとして、発表では主に1780年から1830年まで続いたとされる「英雄医学」（瀉血や強力な瀉下剤に頼った荒々しい治療法を指す）からモートンによるエーテル麻酔の施行（1846）、クロード・ベルナールの「実験医学理論」宣言（1865）、コッホの細菌学研究（1876-1880）までを俯瞰した。一方、自然療法としては、1810年にドイツのハーネマンによって打ち立てられたホメオパシーを中心にアロマテラピー、キネジテラピー（運動療法）、フィトテラピー（植物療法）を考慮に入れた。

19世紀医学史のなかにエミール・ゾラの「反近代医学的」、もしくは「ギリシア的」といえる医学思想を位置づけることが発表の目的であった。これまでのゾラにおける一般的なイメージとしては、当時最新の遺伝学や生理学を軸に20篇の小説から成る『ルーゴン＝マッカール叢書』（1871-1893）を構成し、そこで鉄道やデパートなど近代化社会を雄渾な筆致で描いた進歩主義者というものが主流であった。さらに1879年に出会ったクロード・ベルナールの『実験医学序説』（1865）に熱狂的な賛同を示し『実験小説論』（1880）を上梓したことが、「近代医学の信奉者」としてのゾラのイメージを決定づけていた。しかしながら、ゾラはジャーナリスト時代に書いた評論でキネジテラピーやホメオパシー医療への関心を示している。ゾラはEugène Paz (*La Santé de l'esprit et du corps par la gymnastique* : 1865) や Alphonse Teste (*Comment on devient homéopathe* : 1865) を挙げており、これら自然療法に関する著作がベルナールの『実験医学序説』と同年に出版されていることは当時の医学史を特徴づけている。医学史家のフォーレによれば、Testeの著作が出版されたバイエール社はフランスにおける1832年のコレラ流行以降ホメオパシーをフランスに浸透させる役割を果たしたといわれ、リト雷訳によるヒポクラテス全集（1839-1861）や植物療法（1891）に関する著作も刊行している。ゾラがバイエール社の作品に親しんでいたことに着目しながら、出版の側から当時の医学思想史を検討した。

ゾラは結核や狂気、運動失調症など近代医学の治癒できない遺伝的病を「原罪」とし、その前に無力な人間を描きつづけた。そしてその病と闘うべく「医師」としての登場人物にゾラは自己の科学観を語らせている。『実験小説論』のなかで「実験科学だけが天才の証拠となる」と断言したゾラがその後実際に描いた医師たちの口から出た言葉は「科学に絶対はない」（『生きる欲び』1884）であり、「医学は実験科学ではなく術である」（『パスカル博士』1893、『ルルド』1894）であった。『パスカル博士』の草稿準備メモにゾラは、「科学の及ばない未知の領域を示す為に遺伝を選んだのだ」と記すが、そこにゾラが科学に求めた「謙虚さ」という概念が表出している。発表ではパラケルスス的世界

観に基づくパスカル博士の医学観（博士は 15 世紀の書物にみた *médecine des signatures* としているが、現在の植物療法にも受け継がれるこの鍊金術的アナロジーの概念に関してはミシェル・フーコーも『言葉と物』の「外微」で詳しく述べている）や初期作品に出てくる医師の自然療法への関心にも言及した。

ゾラは積極的に近代と対決して新しい思想を伝えたというよりも、ゾラ自身のやり方で、科学知によって忘却された人間の根源を発見しようとしたのだといえる。人を生かすのが自然であるならば、自然の一部である人間の健康もまた、自然との関わりのなかで癒されるべきものであり、科学はその事実を謙虚に認めて弛まない努力を続けねばならない、それがゾラの理想とした科学の姿であった。

（林田 愛）

## (2) 「ヴェネツィアと死の表象—シャトーブリアン、バレス、プルースト」(第二研究班第 4 回研究会 発表 2)

「水の都」ヴェネツィアは古来多くの文学者・芸術家を惹きつけてきた。ヴェネツィアはラグナ（潟）の水面下に長い杭を打ち込んで基礎を造り、その上に建設された人工的な島を中心としている。アドリア海の多くの島々を含む。西暦 5 世紀、フン族による侵入、東ゴート族の進出により海岸住民が避難先を求めてここに移住して開いたのが嚆矢とされる。その後しばらくビザンティン帝国の支配下にあったが、やがて独自の海軍をもち、地中海に次第に勢力を拡大していく。当時から西洋と東洋、そしてスラブ世界を結ぶ要衝の地として認知された。

ヴェネツィアは海洋輸送に力を入れ、コンスタンチノポリス、アレクサンドリア、中東などで仕入れた絹織物、香料などをヨーロッパ諸国に売り、木材や鉄や布を東方に売りさばいた。また十字軍の輸送において大きな役割を果たした。その絶頂期はルネサンス時代であるが、しだいに東からはトルコ勢力の伸張、西からはフランスの圧力が強くなり、苦戦を強いられるようになる。キプロス島の放棄（1571）、クレタ島の放棄（1669）によって、地中海での経済的覇権は失われ、衰退が始まった。

文学の中にあらわれたヴェネツィアのイメージを見ると、そこには東方貿易で得た巨万の富に飾られた華麗な都市、西洋と東洋を結ぶ水上都市といった称賛とともに、没落しつつある栄光、廃墟を予告する陰気な様相が見て取れる。ここではシャトーブリアン、バレス、プルーストにしぼって見ていく。

シャトーブリアン（1768-1848）の『墓の彼方からの回想』は、1833 年のヴェネツィア滞在について第 40 卷第 4 章以下で語っている。とりわけ彼は死者や墓地について多くのページを割いているが、これは政治と私生活における挫折を直接反映しているようだ。モーリス・バレス（1862-1923）もまたヴェネツィアを愛した作家の一人で、しかもこの町がもつ不吉で陰の部分に惹かれたのであった。反ドレフュス派であり軍隊擁護派であり、ナンシーおよびパリの代議士、アカデミー会員としてのちにますます愛国主義へと傾斜するバレスの表の顔と、異国であるヴェネツィアをうたう審美家の顔とはどのように結びついているのか、『愛と苦しみに捧げる書』（1903）を通じて検討した。

マルセル・プルースト（1871-1922）の場合、最初のヴェネツィア体験はイギリスの美術史家で

あり思想家のジョン・ラスキンの影響のもとにあったが、しだいに作品を書き進めるにつれ、個人的なヴェネツィア像を築いていく。そこには祖母の死の記憶や、恋人の死と再生の物語が縫い込まれることになる。以上 3 人のヴェネツィア体験を通して、ヴェネツィアのもつ死のイメージのさまざまな様態を分析した。

(吉田 城)

(3) 「第一次世界大戦による<土地>の破壊—プルーストを中心として—」(第二研究班第 5 回研究会 発表 1)

マルセル・プルースト (1871-1922) という作家と第一次世界大戦との関わりは、研究主題として取り上げられることがほとんどなく、プルースト研究史のなかでは比較的手薄な部分として残されてきた。しかし戦時中の書簡にも認められるように、作家はこの未曾有の出来事に強い関心を持ち続け、確固たる意志を持って小説に取り込んだという事実を無視することはできない。そこで今回は、同時代の重要なトポスであり、<土地>と不可分な関係にあるモニュメントという要素に焦点をあて、戦争によるそれらの破壊を作家がどのような形で小説に反映させたのかという点について若干の考察を試みた。

数ある破壊のうちでも、1914 年 9 月に起きたランス大聖堂の破壊は最も衝撃的な出来事の一つであったが、『見出された時』のなかでシャルリュス男爵がこの事件に言及したさい、コンブレー教会を引き合いに出している点は非常に興味深い。ごくありふれた「村の教会」と、フランスを代表する大聖堂=モニュメントを等価なものとして扱おうとする男爵の姿勢が物語るのは、何よりもまず主人公の私的な記憶に結びついたこの教会が、同時にゲルマント一族の系譜を象徴し、フランスの歴史と芸術を体現するモニュメントであるという事実である。ピエール・ノラは、19 世紀末に生じた記憶をめぐる根本的な変化、すなわち公的ものから私的なものへの記憶の移行を指摘している。その移行期を生き、記憶の個人性と公共性を二つともに感じ取っていた作家は、両者をコンブレー教会という一つのモニュメントに託して描き出しているということができるだろう。

そして作家は、シャルトル近郊にあったはずのコンブレーをシャンパニュ地方に移してまでこの街を戦火に曝し、教会をはじめとした数々のモニュメント=「記憶を喚起するもの」を破壊する。本発表はそこに、<書物>という作品の創造を見えたプルーストが、モニュメント的な在り方を乗り越えようとするさまを読み取る試みでもあった。過去との関わりを保証する記憶装置として建築を否定=破壊したさきに、独自のエクリチュールを立ち上げること。そして、<土地>に根ざした建築とは異なり、特定の場所に束縛されることのない<書物>という作品を、物語の基盤としての<土地>=コンブレーからも解放することが問題となっているのではないか。ラスキンに抗したプルーストにとって、一つの作品は、記憶とともに<土地>に結ばれることによってではなく、その絆を断つことで初めて芸術作品としての普遍性を獲得する。コンブレーの破壊は、そうした思想の一つの到達点なのであり、第一次大戦という史実を創作に取り込んだことの意味が単なる時事評的なレベルにとどまるものではないことを示している。それは、<土地>、記憶、芸術作品、そして<書物>といった、作家の文学理論の本質へと開かれた主題でもあるのだ。

(小黒昌文)

(4) 「セリーヌ『城から城』における人物描写—ヒルダ・フォン・ラウムニッツをめぐって—」  
(第二研究班第5回研究会 発表2)

戦後のセリーヌ作品においては、対独協力者と呼ばれる側に入った人間ならではのメッセージを社会に伝えることが創作の原動力となっていたと考えられる。レジスタンス神話を盛り上げるのに懸命だった特に50から60年代にかけてのフランス人にとって、認めるのが困難な歴史の侧面というものが実際に存在したわけであり、『城から城』執筆においてもセリーヌとしては、そういう側面を明らかにすることこそが大きな狙いだったのではないだろうか。

小説に登場するヒルダ・フォン・ラウムニッツは、セリーヌがこれまで描いてきた美女たちと同様に際立った美少女である。しかし彼女は他の美女と同列に論じることができない。セリーヌにとって脚は、本来なら気品を放ち精神性を醸し出す総合的な女性美を表す部位であるはずだが、ヒルダの場合は、脚の美しさにもかかわらず、そうした精神性が完全に損なわれてしまっているからだ。また、執筆当時も反ユダヤ主義者として世間から反感を買っていたセリーヌが、彼女を賞賛する際あえて自らを「ラリスト」と価値付けるという挑発的な書き方をしており、この点がやや意外な印象を与えていている。そして最後に、そもそもこの少女はドイツ人と外国人のハーフであり、このような混血の少女に彼がこれまでの小説で披露してきた独特の美的価値を与えるのは、作者の思想的立場からいってあまり自然とは言えない。

セリーヌがこのヒルダというキャラクターを作り上げるにあたって持っていた態度を整合的に理解するには、その理由の一つとして、ヒルダを作りだしたのは混血という出来事を示し、それをポジティブな方向へ価値付けしたかったからではないか、というのも考えられるだろう。ただしヒルダは物語中で大きなポジションをしめる人物ではないため、この点を確認するためには、彼女のアイデンティティの大きな部分を占めるラウムニッツの娘であるという設定に注目する必要がある。

ラウムニッツはフランスにおけるゲシュタポの首領だったベーメルブルクという人物を元に創作されている。セリーヌはベーメルブルクを恐れていたが、自ら創作したラウムニッツに対しては、恐怖の対象とは言いながらも、同時にゲシュタポであることの明言を避ける、フランス人警官ヌヌイユに卑劣な密告をうけてヒトラーに敵対視されるようにする、といったように、反感を買わないような人物として配慮した書き方をしている。これはフランス人対ドイツ人という単純な善悪の構図を否定したいという、対独協力者として糾弾されていた作者ならではのメッセージが表れた部分ではないだろうか。このように確認をすると、ヒルダの人物像も、このラウムニッツを肉付けする重要な要素の一つだったという可能性が考えられる。つまり、人種主義者のイメージが強いドイツ人の将校が外国人と結婚し、美しい娘をもうけたという設定は、ラウムニッツがイメージ通りの差別的なドイツ人ではないことを示し、そのような組み合わせの結婚が成功するものだという良い意味での意外性を作り出しているわけである。そしてこのことは、混血は社会を悪化させるというナチス流の人種観を拒否し、当時の反フランス勢力が思想的に一枚岩でなかったことを示すのに役立っているのである。

(早川文敏)

# 記憶の蒐集家

小黒 昌文

「あなたのお宅は、なんとまあ殺風景なんだろう！」

マルセル・プルーストの長編小説『失われた時を求めて』に登場する重要な人物の一人であるシャルリュス男爵は、芸術作品など一つも飾られていない主人公のアパルトマンについて、「才気と横柄さと趣味の良さとを交え」た口調でこう言い放つ。パリ 8 区マルゼルブ街のプルースト家を訪れたオスカー・ワイルドが、マルセルの両親を前にして同じ発言をしたという逸話の真偽は定かではないものの、蒐集家の視点から見れば至極味気ない家にすんでいたという点で、主人公と作者との間に大きな隔たりはなかったといえる。今日では「神話」となったオスマン通りのコルク張りの部屋にしても、状況は同じであった。

しかしプルーストのこうした「無頓着」とは裏腹に、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてのブルジョワジーにとって、<室内>という場が帯びた重要性はことのほか大きなものであった。産業化やオスマン男爵による都市改造に見られる社会変化の結果として、公共の場に対する個人の私的な空間の意識が高まったことがその要因といわれており、近代社会という<屋外>に対する隠れ家としての<室内>は私的な理念の解放の場として位置付けられることになる。ブルジョワ階級の人々が多額の資産を注ぎ込んで骨董品を蒐集し、それらで住まいをうめ尽くすことによって *horror vacui* とよばれる心的な状態（空虚に対する強迫観念的な恐れ）を払拭しようとしたのもやはり同じ時期であった。

リアリズム文学を推し進めたゴンクール兄弟は 18 世紀フランス芸術の蒐集家でもあったが、自分たちの蒐集品について語った『芸術家の家』(1880 年) の序文で件の蒐集熱に触れた弟のエドモンは、「ブリカブラコマニ」 *bricabracomanie* という何やら呪文めいた響きのする名（「がらくた」や「骨董」を意味する *bric-à-brac* という語に、「～狂」「～中毒者」の意をもつ *-manie* を付した語）をこれに与えている。時に病的ですらあるこの情熱は、近代都市生活の歪みが引き起こした一つの社会現象に他ならなかった。

こうして「大衆化」の進んだ蒐集行為と室内空間との関わりは、たとえば小説家バルザックの眼差しをとおして『従兄ポンス』(1847 年) のなかに描き出されているし、ユイスマンスの小説『さかしま』(1884 年) の主人公デ・ゼッサントがパリ郊外のフォントネーに所有した邸宅は、世紀末の耽美主義者たちが現実逃避の場、過去追慕の場を探し求めて築き上げた<室内>を見事に体現している。奇しくも邸宅のサロンには、ボードレールの

散文詩 « Anywhere out of the world » が象徴的に飾られている。サロンとは名ばかりの密室に充満する閉息感を、ユイスマンスの読者は忘れることができないに違いない。

極私的で特異な＜室内＞というトポスは、同時代の作家たちの関心をひきつけることによって、無視することのできない文学的な主題を形成していた。このような文学を生み出した土壌に通じていただけでなく、＜室内＞の人でもあり続けたプルーストが最後まで蒐集から遠いところにいたという事実は興味深い。<sup>アマトゥール</sup> 芸術の愛好家であったはずの作家は、積極的な株取引を行なうだけの金銭的余裕がありながら、絵画や彫刻の蒐集に熱をあげることも、古書集めに没頭することもなかった。プルーストは蒐集という行為をどこまでも閉息的で自己満足的なものと考えており、他の誰よりも『失われた時』の主人公がこの主張をはつきりと代弁し、また実践している。

だが、めぐりあわせの妙とでもいうのだろうか、プルーストが残した作品の最良の読み手のひとりであったヴァルター・ベンヤミンは、20世紀を代表する思想家であると同時に熱心な蒐集家・愛書家でもあった。1931年に発表された蒐集をめぐるエッセイ「蔵書の荷解きをする」<sup>カオス</sup> のなかに、ベンヤミンは次のような一節を残している。「確かにいかなる情熱も混沌と境を接しています。しかし、蒐集の情熱が境を接しているもの、それは記憶<sup>カオス</sup> の混沌なのです。」個々の書物は、それが本来属していた時間的・空間的な文脈を喚起するがゆえに人を魅了するのであり、ベンヤミンが「真の蒐集家」と呼ぶ人々と蔵書との関わりの本質もそこにある。だが、思想家が自分の蔵書の荷解きをした折に思い起こしたのは、かつて知った場所をめぐる「様々なイメージ」であり、少年時代の子供部屋にまで通じる「様々な思い出」であった。蔵書という蒐集品をめぐるベンヤミンの体験が、諸感覚によって導き出されるプルースト的な記憶の横溢と重なりあう。

閉じられた蒐集家のあり方を否定したものの、私的な印象と思い出の無数の断片を<sup>カオス</sup> 「混沌」からすくいとすることに生涯を賭したという意味において、プルーストは極めて情熱的な蒐集の人でもあったといえるかも知れない。『失われた時』の主人公の心のなかで母親の思い出と結びついた『フランソワ・ル・シャンピ』というサンドの書物には、ベンヤミン的な蔵書作りの糸口を認めることができるだろう。しかしながら、作家の内奥に犇めく記憶が複数の書物との関係にゆだねられ、蔵書として形を成すことはついにない。

プルーストという、この一風変わった蒐集家は、密やかな記憶のコレクションの総体が一冊の書物として立ち上がり、人々に対して開かれることを望んだのである。

## 研究会の報告

「テキスト輪読：Aleksandr Pushkin. *Eugene Onegin*. Translated from Russian, with a Commentary, by Vladimir Nabokov. Princeton University Press. 1975.」範囲：第3歌第1連から第15連まで (pp. 317-360)

『エヴゲーニイ・オネーギン』は第3歌に来てようやく主人公とヒロインの出会いについてふれ、オネーギンへの想いに胸を焦がすタチヤーナの様子が描かれることになる。それ違いはこの小説の大きなテーマのひとつだが、プーシキンはそれを形式的にも実践している。すなわち、二人の出会いの場面は直接的に描かれるのではなく、オネーギンとレンスキイとの会話のなかでついでのように言及されるのである。だがプーシキンのこうした技巧性は、ときに整合性を犠牲にすることにもつながるだろう。

実際ナボコフはプーシキンの対話の使い方の新しさを強調する一方で、第2歌との食い違いを控え目に指摘している。ナボコフの指摘は2点にまとめられる。オネーギンのレンスキイにたいする態度は第2歌から一変している。この場面で、おまえの恋人は誰かといったことをレンスキイから聞き出しており、これはすでに第2歌でオネーギン自身了解済みであるようにもみえるが、そうではない。——つまり、このナボコフの指摘で含意されているのは、第2歌で二人のあいだで交わされていることだけがふれられていたその会話を、第3歌の冒頭で実際に再現させていると読めるならば、すでに了解ずみとも思える話題をことさらに反復しているようにみえても問題ないが、オネーギンの態度の違いを見るならばそう読むことはできないということだ。面白いのは指摘の細かさと口調の控え目さとのギャップだろう。第3歌でタチヤーナが読み、プーシキン自身が読んでいた小説の難点を、ナボコフは大略、紋切り型の多用や細部におけるリアリティの欠如にみて、いちいちこき下ろしてゆくのだが、それと比較して——あるいはプーシキンにたいする賞賛ぶりと比較して——この指摘の控え目さは特徴的だ。ほかにもたとえばタチヤーナは恋愛小説を読みふけりながら、ヒロインに自分を重ね、その恋人にオネーギンを投影する。だがナボコフは、フローベールのエンマやトルストイのアンナになら投げかけるであろう「悪しき読者」という言葉をここで使うことはない。

語られている内容と語る口調とのこうしたギャップは、この第3歌への註釈の他の箇所にもみることができる。第12節でプーシキンの読んでいた「英國のミューズ」による詩や小説が挙げられているが、例によってナボコフはプーシキンの英語能力に疑問を投げかけ、英語の作品もフランス語訳で読んでいたのだと主張する。ヴァンパイアものについてはバイロンの詩『不信者』(1813)、小説『ヴァンパイア、お伽話』(1819)に言及しつつとくに後者にふれて同年仏訳が出ていたことを指摘し、「陰気な放浪者メルモス」にかんしてはジャン・コーベンの自由訳による Mathurin [sic], *Melmoth, ou l'Homme errant* (1821、当時マチューリンの名はフランスで間違った表記で流通していた) の主人公だといっておいてから、原典は Charles Robert Maturin, *Melmoth the Wonderer* (1820)だとついでのようにいい、一方でプーシキンがこのつまらない小説(の仏訳版)を「天才の仕事」とまでいるのはコーベンの「自由訳」版しか知らなかつたのだから奇妙だと、ユーモラスな留保をつけている。そして「さまよえるユダヤ人」にかんしては、他の註釈者が引くグーテ「叙事詩の断片」(1774)やジョージ・クローリー『サラテル』等々、ドイツ語、英語で書か

れたさまざまな文献を挙げつつ、そのたびに「こうしたものを参照するのはなんの根拠もない」「まったく関係ない」と繰り返しいい、1820年に匿名の作者によってパリで出された *Histoire du Juif-errant écrite par lui-même* をはじめ、フランス語の文献を列挙してゆく。つまり、ここで註釈はフランス語以外の参考先を否定する声が徐々にかん高くなつてゆくよう、正確に配置されている。しかもとりわけ最後の「さまよえるユダヤ人」にかんしていえば、これはなかばアポファシス的なレトリックだといってよく、フランス語以外の文献を挙げれば挙げるほど、そうした文献をも列挙したいという欲望が透けてみえもするのだ。

むろんナボコフが独特の視点を交えつつ可能なかぎり学術的であろうとしているのは疑いえないが、レトリックと語られている内容とのいかにもナボコフ的なずれをみないかぎり、逆にナボコフに足をすぐわれかねない（エドマンド・ウィルソンのような？）批判が今後もプーシキニストから出てくるだろうし、その「むだな情報や主観的なおおよその観察」（ユーリー・ロトマン）ゆえに *EO* 註釈は不當に評価されることだろう。

ナボコフの独自性ということにおいては、今回の範囲内に面白い指摘がある。ナボコフはオネーギン・スタンザへの影響を与えたものとしてジュコフスキイ『スヴェトラーナ』（1812）を考えている。このバラッドは各14行の全20連から成り、各連はソネット的な韻を踏み（bAbAcEcEddIffI）、4脚（男性韻をもつ b, c, d, f の8行）と3脚（女性韻をもつ A, E, I の6行）の2種類の強弱格で構成されている。ビュルガーのバラッド『レノーレ』（1773）をロシア語にしてもいるジュコフスキイが、そのパロディともいべき『スヴェトラーナ』でこのソネット的な形式を用いていることが、プーシキンによるオネーギン・スタンザの選択に影響を与えたのではないかとナボコフはいうのだが、プーシキニストがナボコフのこの指摘にたいしてどう遇しているかはともかく、なかなか興味ぶかい指摘ではある。この箇所と直接の関係があるわけではないが、ナボコフは1957年6月17日付エドマンド・ウィルソン宛の手紙で「あなたが『バイロンのリズム』と呼ぶものをプーシキンはジュコフスキイが英語の詩を訳したものから得ていた」のだといっている。おそらくバイロンへのオルタナティヴとしてナボコフはジュコフスキイをもち出してくるのだが、そこにはプーシキンにまつわるイメージへの学術的であるか否かを越えた自由な批判性がこめられているだろう。

ロシア語のニュアンスを注釈する際、ナボコフが過剰な相似性につくのも同断だ。たとえばプーシキンお気に入りの「*nega*」には「やわらかさ（mollitude）、やさしい愉悦、甘さ（dulctitude）にはじまり、物思いに耽る感じや安逸や官能的なやさしさ（tenderness）などさまざまな陰影を帶びつつ、あけすけな快楽にいたるまでの幅がある」といった具合だが、そこには通りのいいイメージによる代置としての翻訳を、過剰なまでの代置可能性によって批判する力がみなぎっているのだ。

（小西昌隆）

### 活動状況（つづき）

◆ 以下の要領で、特別研究会が開かれました。

日 時： 2004年6月11日（金） 午前4時半より6時まで

場 所： 英米文学共同研究室（文学部東館4階）

- 発 表： 1. 侘美真理（東京大学大学院博士課程）「『ヴェール』の奥に—*Villette* と *The Lifted Veil* における『幻影』の表象と『物質性』について」  
2. 神内 郁（東京大学大学院博士課程）「*A Passage to India* におけるアレゴリーの地平」

お知らせ

◆ 第一研究班が以下の要領で第 10 回研究会を開きます。

日 時： 2004 年 7 月 17 日（土） 午後 1 時より

場 所： 京大会館 103 号室

報 告： 柿沼伸明（松蔭女子大学）「ナボコフ訳・注『オネーギン』第 3 歌第 16 連から第 35 連まで」

コメンテーター： 小西昌隆（早稲田大学）

◆ 5 月の研究会から、松蔭女子大学の柿沼伸明さんと東京大学大学院修士課程の秋草俊一郎さんを新メンバーに迎えました。

後記：ニューズレター *TRANS* の 9 号をお届けいたします。今回は、第二研究班の研究発表レジュメが加わり、いちだんと多様な内容のものになりました。また先月、初めての試みとして、東京大学の大学院から二人の発表者を迎え、特別研究会を開きましたが、大学院生同士の交流の機会にもなり、成果を挙げましたことをご報告いたします。そしてこちらは秋の予定ですが、第二研究班が、9 月にリヨン大学助教授ウィリアム・マルクス氏を迎えてシンポジウムを開き、また題を「T・S・エリオットとポール・ヴァレリー」（仮）として同氏に講演いただくことになっています。HP と次号で詳しくお伝えします。（河井）

研究会事務局

〒606-8501

京都市左京区吉田本町京都大学大学院文学研究科

英米文学研究室（担当：河井）

tel./fax: 075-753-2828

e-mail: trans-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp

web page: <http://www.hmn.kyoto-u.ac.jp/trans/>